

# 「音大生の100曲」 その2

## — 楽曲に対する知識を単なる知見に留めないための論考 —

柴田 篤志

### "100 TUNES for Music college students" #2

#### An attempt to turn information about musical-tune into one's own knowledge

本稿は、2020 年の小論「音大生の 100 曲、作成に向けての予備研究」に論を継ぐものである。

## 0. はじめに

五年前に認めた小論に於いて、音大生ならば知っておくべき（知らないと開示することに強い羞恥を感じる）100 曲を定める為の予備研究に関して報告し、《プレ常識曲リスト》《音大生のための 100+10 曲リスト》の二つを提案した。

前者は「既知っているべき曲」、後者は「これから知るべき曲」という位置づけでのリストとしたが、今回はこの二つのリストを基本的には用い、「楽曲を知ること」と「楽曲を理解すること」の間にギャップがあることを明らかにし、楽曲知識とはどんなものであるのか、特に音大生という日常的かつ専門的に音楽を学ぶ若者達にその知識を付与する側は何に留意すべきであるかについて、いくつかのデータから論考して行きたい。

## 1. 「50のシチュエーションに合致する楽曲」調査

2022 年度に行った調査である。既に確立した《プレ常識曲リスト》並びに《音大生のための 100+10 曲リスト》を元に 87 名の作曲家による楽曲を授業で解説し、その上で以下のような課題を課した。

-----

以下の 50 項目から最低 30 項目を選んで、そのシーンに相応しいと思う曲を一項目につき一曲だけ紹介してください（複数曲紹介しても加点はありません）。最低で 30 項目なので、増える分には構いません。

項目：1 結婚式 2 葬式 3 誕生日 4 卒業式 5 運動会 6 引っ越し 7 花見 8 一人旅 9 花火  
10 新社会人 11 夏休み 12 海 13 ハイキング 14 梅雨 15 花畑 16 初デート 17 失恋

18 片思い 19 ドライブ 20 乗馬 21 掃除 22 料理 23 風呂 24 睡眠 25 喧嘩 26 春  
 27 夏 28 秋 29 冬 30 朝 31 星 32 月 33 朝日 34 夕日 35 夕方 36 夜 37 雲 38 希望  
 39 夢 40 愛 41 怒り 42 慈しみ 43 歓喜 44 欲望 45 諦観 46 孤独 47 満足 48 疲労  
 49 興奮 50 悲嘆

-----

教養テーマ講義の授業に於いて紹介した作曲家が 87 人であり、この作曲家の楽曲から選ぶことを条件とした。授業に於いて紹介した楽曲を用いてもいいが、紹介されなかった楽曲を用いた場合加点する、と言う条件である。

上記以外にも細かな配点に関するルールを定めているが、本研究でデータとして用いる限りに於いて影響はないため割愛する。

データ供与者は 42 人。延べ 1811 曲のデータとなった。

#### ・ 1-1 項目による忌避傾向と項目の属性の関係

50 項目はいくつかの属性に分かれる。

行事や儀式→ 1 結婚式、2 葬式、3 誕生日、4 卒業式、5 運動会、6 引っ越し、11 夏休み（七項目）

娯楽→ 7 花見、8 一人旅、9 花火、13 ハイキング、15 花畑、19 ドライブ、20 乗馬（七項目）

環境、天候→ 12 海、14 梅雨、31 星、33 朝日、34 夕日、36 月、37 雲（七項目）

内的心象→ 17 失恋、18 片思い、25 喧嘩、38 希望、39 夢、40 愛（六項目）

季節や時間経過→ 26 春、27 夏、28 秋、29 冬、30 朝、32 夜、35 夕方（七項目）

日常→ 10 新社会人、16 初デート、21 掃除、22 料理、23 風呂、24 睡眠（六項目）

感情→ 41 怒り、42 悲しみ、43 歓喜、44 欲望、45 諦観、46 孤独、47 満足、48 疲労、49 興奮、50 悲嘆（十項目）

課題は 50 項目中 30 項目に対し楽曲を対応させるものであり、提出者によって空欄となる項目が生じる。最も空欄が多かったのが「23 風呂」で 12 名が空欄、継いで「3 誕生日」「7 花見」「22 料理」「48 疲労」が 11 名。逆に空欄が少なかったのは「2 葬式」「32 夜」「36 月」で全員対象曲を選択していた。継いで「1 結婚式」「38 希望」は空欄 1 名であった。

日常六項目は計 50 名が空欄になったが、内的心象六項目は空欄合計 21 名。日常の出来事を音楽と結びつけることは、“日常が音楽”である音大生だからこそ難しいのかもしれない。また、日常的なルーティーンになっている音楽活動は当然個人の内的エネルギーと直結するので、内的心象との結びつきは強くなるというのも創造しやすい。

一方、内的エネルギーそのものであるはずの感情十項目は計 62 の空欄が生じている。ただし、「41 怒り」「43 歓喜」は各々空欄 3 であり、「50 悲嘆」は空欄 2 と、空欄になる

率は低い。喜怒哀楽は当人が自覚しやすいエネルギーであるから、とするなら、「48 疲労」「47 満足」「45 諦観」「44 欲望」などはそれぞれ 11、10、9、8 と空欄が多めであった。

## ・1-2 選択された楽曲と作曲家

「授業で紹介した 87 人の作曲家」という縛りを無視した 10 名が上乘せられて、全部で 97 名の作曲家が選出されている。これには背景があり、「対象楽曲の作曲年（もしくは初演年）が 17 世紀、18 世紀、19 世紀前半、19 世紀後半、20 世紀前半、20 世紀後半の六区分全てを網羅していることが望ましい」という条件に加え、「授業で紹介した作曲科の出身国は 20 ヶ国、この中から 5 ヶ国以上に作曲家を選出すれば加点」という条件があったため、授業で紹介した作曲家の生没年などを踏まえて楽曲を対応させる必要から、既にデータとして渡してある「授業での紹介曲」が増えることを予想していた。

例年、教養テーマ講義の授業履修者は 1 年生、2 年生が主体であり、クラシック音楽に幅広い聴取経験のあるものは少ないであろう、という読みがあった。だが、「授業で紹介していなかった楽曲を選出すれば加点」という条件があったため、予想を超えて楽曲の多様性が大きくなった。作曲家 87 人、という縛りを逸脱したのもそのためであろうと推測する。

各項目毎にどのような楽曲が選択されたかについては別に稿を改めるが、今回の研究に於いては「曲に関する情報を知っていること」と「その曲の効果（効能）を使いこなせること」との関係を考えることに焦点を絞りたい。

回答者全員が曲を選定した「葬式」「夜」「月」を項目別に俯瞰してみる。

「葬式」ではエルガー「交響曲第 2 番 第 2 楽章 葬送行進曲」、ショパン「エチュード Op.10-3 別れ」「ピアノソナタ第 2 番 第 3 楽章（葬送）」、フォーレ「レクイエム」、マーラー「交響曲第 5 番第 4 楽章 アダージェット」、ラヴェル「亡き王女のためのパヴァーヌ」などに票が集中した。

「夜」ではムソルグスキー「禿げ山の一夜」、メンデルスゾーン「夏の夜の夢」、プッチーニ「トゥーランドットより誰も寝てはならぬ」、シェーンベルク「浄められた夜」などが目を惹く。ドビュッシー「月の光」、ベートーヴェン「月光」などをこちらに選んだケースも垣間見えた。

「月」では圧倒的にドビュッシーとベートーヴェンが票を集めている。

つまりは、標題にキーワードが含まれている場合、標題からのイメージ想起で選ばれていると想像することが出来る。

たとえば「禿げ山の一夜」や「誰も寝てはならぬ」は夜が明けて朝になる描写を中心とした音楽であるはずだが、両者は「朝」の項目には選ばれていない。勿論正解などはないのだが、「朝」などは圧倒的にグリーグ「ペールギュント第 1 組曲より朝の気分」になっ

てしまうわけで、音楽について知ることが蘊蓄止まりであるのは、この調査を企図した側としては甚だ残念、と感じた。

一方、作曲家から見ると別の構図が見えてくる。

フランクは、この調査を行う前の楽曲紹介において唯一ベルギー国籍の作曲家であったため、多くの回答（26）があった作曲家であった。26 回答が 17 項目に分散し、上がった楽曲は 10 曲。授業に於いては 1 曲（ヴァイオリンソナタ）のみの紹介であったことを考えると、予想を上回る回答の多様さが得られている。

ブルッフへの回答は 3 名のみであったが、授業で紹介したヴァイオリン協奏曲を含め 3 曲が、3 つの異なる項目（初デート、失恋、風呂）に選出されている。加えて、回答者が管絃楽に関わる専攻でなかったことが特筆できる。

リードは回答 6 で項目は 5、同一項目への回答は一組のみだった。回答した 6 名はいずれも管楽専攻ではなかった。

もっとも顕著な分散を見せたのはバルトークで、回答 11 名。この段階でかなり予想より多かったのだが、授業で紹介した「3 つのチーク県の民謡」を上げたのは 2 名のみで、対応項目は別であった。項目もアレグロ・バルバロ」と「笛と太鼓（戸外にて）」が「喧嘩」で重複した以外は全て分散し、10 項目となった。恐らく、授業で紹介した「3 つのチーク県の民謡」が曲としての演奏時間が非常に短く、3 つの曲各々がかなり異なった味わいであったため採用しにくかったことが 9 曲の新曲選定に繋がったと考える。とはいえ、ハンガリー出身の作曲家はコダイ、リストもいることを考えるとバルトークにこれだけ選出曲が多かったことは想定外であった（因みにリストは 38 名が回答しているが、楽曲は 12 種類でバルトークとそれほど変わらない）。

フォーレ、ブルッフ、リード、バルトークと全て「誰でも知っている」作曲家ではないかもしれない。敢えて言えば、この作曲家の書いた曲を何か上げて御覧、と言われて 1 曲あがれば上出来、複数曲はなかなか出ないと考える。だが、こういう作曲家の楽曲を「何かに役立てよう」とするものは、その楽曲名ではなく、楽曲内容を…おそらくは体験と記憶に基づいて…根拠として選出していると考えたい。

## 2. 「シーン（情景）に合致する楽曲」調査

2022 年度の「50 のシチュエーションに合致する楽曲」データをベースに、2023 年度はシーンを「ことば」ではなく、コンテンツで示す形で楽曲の推薦を求める調査となった。

授業に於いて用いた、素材となるであろう楽曲は 99 曲、以下に一覧で示す。

-----  
ヘンデル、G.F. 「水上の音楽」より アラ・ホーンパイプ

バッハ、J.S.	ブランデンブルク協奏曲第2番
ヴィヴァルディ、A.	和声と創意の試み より 「四季」
ヘンデル、G.F.	オラトリオ 「メサイア」 より ハレルヤ
ヘンデル、G.F.	「王宮の花火の音楽」 より 歓喜
ハイドン、F.J.	交響曲第45番「告別」より 第4楽章
ハイドン、F.J.	交響曲第44番「悲しみ」より 第3楽章
モーツァルト、W.A.	ディベルティメント K.136
モーツァルト、W.A.	ディベルティメント K.334
モーツァルト、W.A.	ピアノ協奏曲第20番ニ短調 K.466より 第2楽章
モーツァルト、W.A.	歌劇「フィガロの結婚」より 恋とはどんなものかしら
モーツァルト、W.A.	ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」
ベートーヴェン、L.v.	ピアノソナタ第8番「悲愴」より 第2楽章
ハイドン、F.J.	交響曲第94番「驚愕」より 第2楽章
ベートーヴェン、L.v.	ロマンス第2番
ベートーヴェン、L.v.	ヴァイオリンソナタ第5番 春
ベートーヴェン、L.v.	交響曲第3番「英雄」より 第2楽章
ベートーヴェン、L.v.	交響曲第5番 終結部
ベートーヴェン、L.v.	エグモント序曲
ベートーヴェン、L.v.	交響曲第7番より 第2楽章
シューベルト、F.P.	子守歌 D.498
シューベルト、F.P.	ます D.550
ウェーバー、C.M.v.	舞踏への勧誘
シューベルト、F.P.	ピアノ五重奏曲 D.667
ベートーヴェン、L.v.	交響曲第9番より 終結部
シューベルト、F.P.	交響曲第8番（第9番）「グレート」より 第2楽章
ロッシーニ、G.	歌劇「ウィリアム・テル（ギョーム・テル）」序曲より スイス 軍の行進
リスト、F.	交響詩 レ・プレリュード 終結部
ショパン、F.	ピアノソナタ第2番より 第3楽章（葬送）
クライスラー、F.	美しきロスマリン
グリンカ、M.	歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲
メンデルスゾーン、F.	劇付随音楽「夏の夜の夢」より 結婚行進曲
シュトラウス1、J.	ラデツキー行進曲
ヴァーグナー、R.	歌劇「ローエングリン」第三幕第一場 婚礼の合唱

- ヴァーグナー、R. 歌劇「ローエングリン」第三幕への前奏曲
- ブラームス、J. 弦楽録重奏曲第1番より 第2楽章
- ヴァーグナー、R. 楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第一幕への前奏曲
- ビゼー、G. 歌劇「美しきパースの娘」第二幕 セレナーデ（小さな木の実）
- ムソルグスキー、M. 交響詩「禿山の一夜」
- チャイコフスキー、P.I. 弦楽四重奏曲第1番より 第2楽章（Andante cantabile）
- ブラームス、J. ハンガリー舞曲 第5番
- ブラームス、J. 弦楽四重奏曲第1番
- シュトラウスⅡ、J. 喜歌劇「こうもり」序曲 終結部
- スメタナ、B. 連作交響詩「我が祖国」より 第2曲 プルタバ（モルダウ）
- ブルックナー、A. 交響曲第4番「ロマンティック」より 第3楽章
- チャイコフスキー、P.I. スラブ行進曲 終結部
- サラサーテ、P.d. ツィゴイネルワイゼンより 第2楽章
- チャイコフスキー、P.I. 交響曲第4番より 第2楽章
- チャイコフスキー、P.I. ヴァイオリン協奏曲 終結部
- モーツァルト、W.A. セレナード第13番 アイネ・クライネ・ナハトムジーク
- チャイコフスキー、P.I. 弦楽セレナーデ
- チャイコフスキー、P.I. 序曲「1812年」 終結部
- ドヴォルジャーク、A. 我が母の教え給いし歌
- ボロディン、A. 弦楽四重奏曲第2番
- ブラームス、J. 交響曲第3番より 第3楽章
- サン＝サーンス、C. 交響曲第3番 オルガン付き
- シューマン、R. ピアノ協奏曲
- エルガー、E. 愛の挨拶
- チャイコフスキー、P.I. 交響曲第5番より 第2楽章
- マーラー、G. 交響曲第1番 終結部
- リムスキー＝コルサコフ、N. 交響組曲「シェエラザード
- ドヴォルジャーク、A. 交響曲第8番より 第3楽章
- ドビュッシー、C. 夢
- フォーレ、G. 歌曲集「3つの歌」より 夢のあとに
- ボロディン、A. 歌劇「イーゴリ公」より ポロヴェツ人の踊り
- グリーク、E. 劇付随音楽「ペール・ギュント」第1組曲より 山の魔王の宮殿にて
- グリーク、E. 劇付随音楽「ペール・ギュント」第2組曲より ソルヴェイグの歌
- チャイコフスキー、P.I. 交響曲第6番「悲愴」

ドヴォルジャーク、A.	交響曲第9番「新世界」より 第2楽章
ドビュッシー、C.	牧神の午後への前奏曲
スーザ、J.P.	星条旗よ永遠なれ 終結部
フチーク、J.	剣闘士の入場
サティ、E.	ジュ・トゥ・ヴ
リムスキー=コルサコフ、N.	歌劇「皇帝サルタンの物語」より間奏曲 熊蜂は飛ぶ
シベリウス、J.	交響曲第2番 終結部
ラフマニノフ、S.	ピアノ協奏曲第2番 終結部
サン＝サーンス、C.	組曲 動物の謝肉祭より「白鳥」
マーラー、G.	交響曲第5番より 第4楽章（アダージェット）
エルガー、E.	行進曲「威風堂々」 第1番
タイケ、C.	行進曲「旧友」
ラフマニノフ、S.	交響曲第2番より 第3楽章
バルトーク、B.	アレグロ・バルバロ
ボロディン、A.	交響詩 中央アジアの草原にて
バルトーク、B.	3つのチーク県の民謡
シベリウス、J.	交響詩「フィンランディア」
ホルスト、G.	組曲 惑星 より「火星」
プロコフィエフ、S.	ピアノ協奏曲第3番
プロコフィエフ、S.	ピアノ協奏曲第3番 終結部
ラフマニノフ、S.	14の歌曲集 第14曲 ヴォカリーズ
ストラヴィンスキー、I.	バレエ音楽 春の祭典
ショスタコーヴィチ、D.	ピアノ協奏曲第1番 終結部
バーバー、S.	弦楽のためのアダージェョ（弦楽四重奏曲第1番 第2楽章）
バルトーク、B.	弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽
プロコフィエフ、S.	交響的（音楽）物語 「ピーターと狼」
ショスタコーヴィチ、D.	交響曲第5番
ロドリゴ、J.	アランフェス協奏曲より 第2楽章
ハチャトゥリアン、A.I.	バレエ「ガヤネー（ガイーヌ）」より 剣の舞
アンダーソン、L.	トランペット吹きの休日
ライヒ、S.	ピアノ・フェイズ

教養テーマ講義の授業に於いては、毎年楽曲にどのような価値を付加して履修生に吸収させるかを変えており、国や地理、作曲年代、作曲家肖像、とシフトして今年度は「楽譜」



を示すことに焦点を当てている。楽曲まるごとのスコアを配布したり示したりすることはできないため、紹介楽曲は主要なテーマ部分や、楽曲を特徴付けている構成が聞き取れる部分などを抜き出して敢えて編集しており、楽曲まるごとを与えることは殆どなかった。例外的にプロコフィエフのピアノ協奏曲第3番は全曲をダイジェストで説明した講義回と、終結部のみを扱った講義回が別であったため、二度カウントしている。

## ・2-1 課題の内容

課題は二つ。課題1は昭和の特撮「ウルトラセブン」の最終回にシューマンのピアノ協奏曲の第1楽章が断片的にはあるが冒頭～終結部まで使われていたことを紹介し、告白（セブンの正体）、戦闘（苦戦）、飛び去る（勝利）の三つのシーンに楽曲を付すことを求めている。

①なるべく脚本やセリフの雰囲気損なわず、三つのシーンのBGMを別の曲に差し替えなさい。一つの曲の、違う部分を用いること。特に、飛び去るシーンには楽曲の終結部を用いること。

②さらに①とは別の曲を選び、原作の雰囲気を台無しにしない。三つのシーン毎に別の楽曲を選んでも宜しい（同じ曲からでもよい）。

①の難しい部分は「一つの曲」で賄う部分にある。対して②は異なる曲の部分を使っていい。②の方が明らかに難度は低く、バリエーション豊かな解答が予想できる一方、①は候補曲を選ぶのがかなり悩むことが予想できた。だからこそ99曲の曲目リストをわたしてあり、実はこの中には実質的に「ほぼ模範解答に近い」楽曲がいくつか混ぜられている。リストからそうした曲を見つけられるかどうか狙いの調査である。②は①で苦労した分気楽にこなせることを狙った。この1-①、1-②の両課題は実を言えば、半分楽しんでもらうためのものであり、①の難度を上げたのは成績評価に明確な基準を設けるためである。

対して課題2は、本稿の考察に使用することを当初から想定した課題である。情景に沿った曲を求めると言う部分は課題1と同じだが、課題1が固定したコンテンツ（映像・音声付き）であったのに比べ、こちらはテキスト。加えて、選択範囲が12ある。候補にしたものは以下の12作品である。

- A 舌切りすずめ
- B 猿かに合戦
- C 花咲かじい
- D かちかち山



E ジャックと豆の木

F ブレーメンの音楽隊

G ヘンゼルとグレーテル

H 走れメロス (太宰治)

I 蜜柑 (芥川龍之介)

J 「旅上」 (萩原朔太郎)

K 「汚れつちまつた悲しみに」 (中原中也)

L 「みだれ髪」 (与謝野晶子) より三首 やは肌の / 清水へ / 春みじかし

J、K、L の韻文作品はテキスト全文を課題に掲載、A から I までの作品は青空文庫のリンクを紹介した。その上で

-----  
 下記の A ～ L の文章いずれか一つを選び、その中から三つのシーンを任意に選択し、課題 1 の①同様、テキストの雰囲気や味わいを損なわず、引き立てる楽曲を推薦しなさい。三つの部分が全て同じ曲である必要はありません。  
 -----

と求めている。

回答者は、まず自分が取り組むテキストを選択し、然る後にそれを読み込んで、音楽を付するに適した部分を探し出す必要がある。音大生の読書習慣はそれほど高い確率で定着しているとは言えないため、「文字を読む」だけで忌避感を覚えられることを避けた。その結果、昔話系と教科書教材になっている確率の高い作品を候補にしている。

解答するにあたり、授業で取り上げた 99 曲のリストは全員に配布してある。その全てを記憶はしていなくとも、数曲は「この曲はこういう曲だ」という認知が確定していることが前提となる調査である。ただし、対象となるシーンに音声、映像があった課題 1 とは全く異なり、こちらは文字情報から音声や映像を「回答者が独力で、ゼロから想起する」必要がある。勿論逆の手順も可能で、自分の楽曲知識の中から利用出来るものをリストを元に複数曲選び出し、それに合致するであろうシーンをテキスト作品から選んでもいい。ただし、そのためにはテキスト 12 作品をそれなりに理解している必要がある。

A ～ G の昔話 7 作品は 100 年程前の文体であり、元々の物語を知っていても読むのはそれなりに労力と時間を消費するであろうと予想できる。

H、I の文学 2 作品のうち「走れメロス」はあらずじくらは知っているだろうが、音楽を付するに適したシーンを選び出すのは読書に長けていなければ難しいと考えた（「蜜柑」は一つくらい文学として硬派のものも入れよう、と考えたもので、これを選ぶ回答者がいることは想定していなかった）。

J、K、Lの韻文3作品は「長い文章を読むのは嫌だ」と考えるものが必ずいることを想定し、候補としている。正直にコメントすれば、韻文に楽曲をつけるのは非常に高度な言語理解とセンスを要するので、こちらに誘引されるものは小数だろう、と予想していた（殊に短歌はあまりに文字の情報が少なく、付与する音楽の方に情報が多くなる）。

## ・2-2 課題の分析結果

回答者43名、ただし課題1-①、課題1-②、課題2のおおの1名が今回の課題規定から逸脱したので棄却し、42名分のデータを分析対象とする。

### 【課題1-①】

解答された楽曲は32曲。複数回答されたものが6曲。

グリーク「ピアノ協奏曲」	6
ショパン「ピアノ協奏曲第1番」	2
ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」	2
ベルリオーズ「幻想交響曲」	2
ベートーヴェン「交響曲第9番」	2
ベートーヴェン「ピアノソナタ第23番 熱情」	2

課題となった素材はシューマンのピアノ協奏曲が使われていたので、類似の楽曲構成になっている曲といえば短調の協奏曲になるとは予想できた。グリークが群を抜いて多かったが、ラフマニノフも楽曲の開始が独奏であることが共通している。この他にも協奏曲はショパン「ピアノ協奏曲第2番」、チャイコフスキー「ピアノ協奏曲第1番」、ラフマニノフ「パガニーニの主題による狂詩曲」、ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第1番」、メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」が上げられた。メンデルスゾーン、チャイコフスキー、ラフマニノフ（1番）はほぼ独奏楽器で曲が始まるところがシューマンとの共通部分である。この中ではチャイコフスキーだけは主題が始まると長調に転じているが、それ以外は全て短調であることが特徴と言える。

解答されたものの中に、交響詩や序曲、ピアノ曲などの独奏器楽曲が10曲あり、これらは楽曲の冒頭から末尾までに楽章のような大きな区切りが存在しない。これと似た解答には、大きな（多楽章の）楽曲であるが、一つの楽章だけで三つのシーンを網羅するものが8曲（重複があるので回答数は11）あった。重複はショパン「ピアノ協奏曲第1番」、ベートーヴェン「ピアノソナタ第23番 熱情」、ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」の三曲である。これは恐らく、オリジナルのウルトラセブンがシューマン「ピアノ協奏曲」の第1楽章だけで構成されていることに倣ったと考えられる。三つのシーンの真ん中にある「戦闘」部分に、カデンツを配当しているものが殆どであったことも根拠としてあげられ

よう。

ただし、同じ協奏曲でも、チャイコフスキー「ピアノ協奏曲」、メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」、ショパン「ピアノ協奏曲第2番」では終結部は終楽章が選ばれている。最も採用の多かったグリーグ「ピアノ協奏曲」も一例のみは第1楽章だけで三つのシーンを配当しているが、やはり終結部は終楽章になっている。これは即ち、有名なテーマや楽章のみではなく「全曲を」理解したうえで部分を切り出していると解釈ができる。

この傾向は交響曲を上げたケースに於いて更にはっきりしており、ベルリオーズ「幻想交響曲」では一例は第5楽章終結部を飛び去るシーンに使用しているが、もう一例は第4楽章(断頭台への行進)の末尾、ファンファーレを飛び去るシーンに使っている。こうした、“大きな楽曲を部分に区切って、その効果を生かすべく再配列する”回答が顕著であった。

### 【課題1-②】

有効回答42のうち、三つのシーンを同一楽曲から選択したものが11、三つのシーンのうち二つを同一楽曲から選択したものが8と、計19が課題1-①と類似の縛りを自らに課していた。これは、課題のルールを読み間違えたものか、もしくは進んで同じ楽曲から選択したものは確認出来ないが、後者であると考えたときに有効回答の半分弱はこの（オリジナルの雰囲気や台無しにする）課題に用いる“手持ちの素材”に欠けている、と判断することが出来る。

同一楽曲を選択したの以下の通りである。

11名中7名が協奏曲を選んでいる。モーツァルト「ピアノ協奏曲第26番」(回答2)、ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」、ラヴェル「ピアノ協奏曲」、ショパン「ピアノ協奏曲第1番」、モーツァルト「ホルン協奏曲第1番」、ブルッフ「スコットランド幻想曲」(以上回答1)の計6曲になる。課題1-①に協奏曲が多かったことと同じ根拠が推定される。

11名中1名はベートーヴェン「交響曲第6番」、1名はドビュッシー「ベルガマスク組曲より 月の光」、1名はムソルグスキー「交響詩薔げ山の一夜」、1名は日景貴文「ビスマス・サイケデリアⅠ」を回答。ベートーヴェン、ムソルグスキー、日景は楽曲構成上いくつかの部分に分けやすく、部分を切り出せるとして、ベルガマスク組曲を上げるのであれば月の光単一曲である必然性はあまり感じられない、と判断した。つまり、この11名はこの課題をこなすにあたって楽曲レパートリーが豊かではない、と考える。

残りの31名のうち、22名は三つのシーンに三つの異なる楽曲を回答している。告白シーンをA、戦闘シーンをB、飛び去るシーンをCとして、ABC各シーンに選ばれた楽曲の曲態分布は以下ようになる。なお、シーンAのみ回答したものが1名いるため、シーンAのみ合計が23になる。

シーンA→単一曲7、序曲4、行進曲4、組曲3、交響曲1、協奏曲2、歌曲2

シーン B → 単一曲 10、序曲 1、行進曲 1、組曲 6、交響曲 0、協奏曲 2、歌曲 2

シーン C → 単一曲 10、序曲 1、行進曲 2、組曲 6、交響曲 2、協奏曲 0、歌曲 1

有意に多いのは単一曲である。シーン毎にその選曲傾向を考察する。

シーン A の 7 曲には重複がない（唯一作曲家でショパンが二曲）。目立った選曲はグリーンカ「ルスランとリュドミラ序曲」、リムスキー＝コルサコフ「シェエラザードより 若い王子と王女」、ラヴェル「ピアノ協奏曲 冒頭」など。

シーン B は「苦戦」なので緊迫感や悲壮感が求められる映像になるが、この雰囲気をつくる曲としては「優美」「軽快」「陽気」「上品」「厳格」「敬虔」といった雰囲気を持つ曲が選ばれる。重厚で部分によって味わいが大きく異なる交響曲が選ばれないのは想定出来るが、序曲が選ばれていないことは回答者に「序曲のレパートリーが少ない」ことの現れと考えられる。目立った選曲はジョプリン「The Entertainer」、フチャーク「剣闘士の入場」、バッハ「ゴールドベルク変奏曲 アリア」など。

シーン C は苦戦の結果最後の最後で逆転の勝利を掴み、疲労困憊の極で戦場をあとにする映像となる。オリジナルがシューマンのピアノ協奏曲（第 1 楽章終結部）だったこともあり、完全な解決というよりも一応の結末（後日譚を感じさせる余韻）を匂わせる。こうした雰囲気を覆すために「無邪気」「気楽」「大団円」をあくまでもポジティブに感じさせる楽曲が選ばれている。一曲（ベートーヴェン「エリーゼのために」）を除くと全て長調の終止であるところも特徴的である。ここに交響曲を選ぶ回答者は意外であったが、ハイドン「交響曲第 45 番 告別（第 4 楽章）」であったのは納得。目立った選曲は前述ハイドンのほか、ツェルニー「40 番練習曲より 第 40 番」、バルトーク「ルーマニア民俗舞曲 第 3 曲踏み踊り」など。

## 【課題 2】

回答者 43 名中、有効回答は 42 であった。

有効回答中、選ばれたテキストは

A 舌切りすずめ	3	I 蜜柑	1
B 猿かに合戦	2	J 「旅上」	1
C 花咲かじい	8	K 「汚れつちまつた悲しみに」	2
D かちかち山	0	L 「みだれ髪」	2
E ジャックと豆の木	2		
F ブレーメンの音楽隊	2		
G ヘンゼルとグレーテル	8		
H 走れメロス	11		

と、かなり広い分布を示した。とはいえ H 走れメロス、G ヘンゼルとグレーテル、C 花咲

かじじいが有意に多かった。テキスト作品は韻文の J、K、L 以外は粗筋であれば知っているものと予想したが、実際に読むとなると E、F、G の海外のものは翻訳によりかなり表現が変わるため、今回の青空文庫のテキストだと選択されにくかったのかもしれない。

出題者としては、全て物語が大きな転換点を内包していて、三つのシーンを抜き出すことが容易になるように配慮したつもりであった。

以下、回答数の少ないものから順に回答された楽曲を上げていく。なお、回答数 1 の I、J は別に考察する。

#### B 猿かに合戦（回答 2）

早く芽を出せ→ムソルグスキー「展覧会の絵より テュイルリー」、ドビュッシー「夢」  
 猿、柿を食う→シューベルト「魔王」  
 柿をぶつける→ヴィダーリ「シャコンヌ 冒頭」  
 栗爆ぜる→リムスキー＝コルサコフ「熊蜂の飛行」  
 猿あやまる→ドビュッシー「月の光」

これ以上なく有名な昔話であるだけに、楽曲を割り当てる箇所が二人でかなり異なった。共通する冒頭はかなり楽曲の雰囲気異なるものとなったところが興味深い。

#### E ジャックと豆の木（回答 2）

冒頭→ストラヴィンスキー「火の鳥 序奏」  
 豆をもらう→ムソルグスキー「禿げ山の一夜」  
 豆が生える→ラヴェル「マ・メール・ロワ 第 2 楽章」、モーツァルト「レクイエムより  
 サンクトゥス」  
 巨人の家から逃げる→ムソルグスキー「禿げ山の一夜」、ヴァーグナー「ワルキューレ  
 の騎行」

二つの回答ともほぼ抽出箇所は等しい。冒頭を含めるか、豆をもらうシーンにするかでの差があるだけ。豆をもらうシーンと巨人の家から逃げるシーンにムソルグスキーが選ばれているが、これはそれぞれ別の回答者が上げている。

#### F ブレーメンの音楽隊（回答 2）

ロバの旅立ち→ベートーヴェン「ピアノソナタ第 8 番 第 2 楽章冒頭」  
 ロバが犬を誘う→モーツァルト「ディヴェルティメント K.136 第 1 楽章」  
 家に侵入→ブラームス「ハンガリー舞曲第 6 番」

泥棒が逃げる→ベートーヴェン「ピアノソナタ第8番 第2楽章中間部」

大団円→ベートーヴェン「ピアノソナタ第8番 第2楽章終結部」、モーツァルト「ピアノ協奏曲第17番」

一人の回答者が全て同じベートーヴェン（それも第2楽章のみ）で回答しているため比較することに無理がある。もう一名の「モーツァルト、ブラームス、モーツァルト」という回答は豊かな選曲レパートリーに基づいたものであると推測できる。

K「汚れつちまつた悲しみに」（回答2）

～風さえ吹きすぎる→プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番 第1楽章冒頭」、ラフマニノフ「エレジー」

～死を夢む→プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番 第2楽章主題」、リスト「超絶技巧練習曲第12番」

～日は暮れる→プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番 第3楽章冒頭」、モーツァルト「ピアノソナタ第2番 第2楽章」

両名とも区切りとする場所は完全に共通する。ただし、そこに配当された楽曲の雰囲気は対照的。一人の回答者はプロコフィエフの協奏曲全曲から抜粋、もう一人は全てピアノ曲を推薦。

L「みだれ髪」（回答2）

やは肌の→ラヴェル「夜のガスパールより 水の精」、モートルと「クラリネット協奏曲 第2楽章冒頭」

清水へ→ドビュッシー「夢」、モーツァルト「レクイエム 冒頭」

春みじかし→グリーグ「二つの悲しき旋律より 春 終結部」、リスト「ラ・カンパネラ」

三首にそれぞれ一曲ずつ推薦するので区切りは共通。ただし、その曲の風情が回答者の個性を非常に強く反映している。今回の調査で狙ったものがほぼ完全にあらわれた回答と言える。

A 舌切りすずめ（回答3）

冒頭（むかしむかし）→ベートーヴェン「交響曲第6番 第1楽章」

婆、家に戻る→シューベルト「即興曲作品120-3 冒頭」

婆、舌を切る→ボロディン「ポロヴェツ人の踊り」、ショパン「エチュード作品10-



12]、シューベルト「即興曲作品 120-3 第 3 変奏」

爺、可哀想と泣く→ショパン「ピアノソナタ第 2 番 第 3 楽章」、シューベルト「即興曲作品 120-3 第 4 変奏」

爺、宝をもらう→ボロディン「ポロヴェツ人の踊り」

婆、大つづら→ボロディン「ポロヴェツ人の踊り」

2つの回答で両者とも雀が舌を切られる部分を選んでいる。うち 1 名は全てのシーンにボロディンを配当しているのだが、その曲のどの部分であるかがはっきりせず考察するための根拠に欠ける。

C 花咲かじじい（回答 8、うち 1 はシーン 1 のみ回答）

冒頭→ブラームス「ハンガリー舞曲第 5 番」、ボロディン「ポロヴェツ人の踊り」、ショパン「マズルカ第 5 番 冒頭」

爺婆白を可愛がる→宮川彬良「僕らのインベンション」

ここ掘れ→ホルスト「惑星より 火星」

急に金持ちに→バッハ「ブランデンブルク協奏曲第 5 番 冒頭」、ドビュッシー「アラベスク第 1 番」、モーツァルト「二台のピアノのためのソナタ」

するとおとなりにも→ショパン「マズルカ第 5 番 中間部」

欲張り爺白借りる→天野正道「交響組曲第 2 番 GR」

瓦や瀬戸欠け→チャイコフスキー「くるみ割り人形 金平糖の踊り」

白殺される→シューベルト「弦楽四重奏曲第 14 番 冒頭」、シューベルト「セレナーデ(ピアノ編曲版)」

白の墓に松→ショパン「ノクターン第 1 番」

白が死んで→ショパン「マズルカ第 13 番」

白で餅つき→リスト「パガニーニ大練習曲第 6 番 中間部」

枯れ木に花→ホルスト「惑星より 木星、中間部」、マクダウェル「森のスケッチ」、ドヴォルジャーク「交響曲第 9 番 第 4 楽章 第 2 主題への経過部」、チャイコフスキー「スラヴ行進曲 中間部」

欲張り爺捕まる→「パガニーニ大練習曲第 6 番 冒頭」

日本昔話では最も支持率が高かった。これは話の内容が有名であることと、トピックとする三つのシーンが選びやすかったためだと考えられる。事実、楽曲を配当する部分は回答者 8 名で 12 に及んだ。大団円となる「灰を撒いたら花が咲く」部分は 4 人だけと、予想に反してあまり選択されていなかった。善玉悪玉がはっきりした物語である方がドラマ



に仕立てるときは有利であることが逆説的に示されたと感じる。(楽曲を用いて物語を説明するのではない→結論や落ちにむけて舞台を作る必要がない→主要登場人物へのライトモチーフのような楽曲使用が可能になる)

#### G ヘンゼルとグレーテル (回答 8)

冒頭(貧しい木樵の)→サン＝サーンス「動物の謝肉祭より カンガルー」、ドビュッシー「夢 冒頭」

そんなこたあ俺には→ラフマニノフ「ヴォカリーズ」

森へ出かける→モーツァルト「ピアノ協奏曲第 21 番 第 1 楽章 冒頭」、ウォルトン「ヨハネスブルグ祝祭序曲 中間部」

小石を集める→ベートーヴェン「ピアノソナタ第 14 番 第 1 楽章」、ドビュッシー「夢」

眠りの精→チャイコフスキー「四季より 秋の歌」、モーツァルト「ピアノ協奏曲第 21 番 第 2 楽章 冒頭」、

やれやれどうしましょう→サン＝サーンス「動物の謝肉祭より 雄鶏と雌鶏」

お菓子の家発見→ウォルトン「ヨハネスブルグ祝祭序曲 冒頭」、グリーク「山の魔王の宮殿にて」、モーツァルト「ピアノ協奏曲第 21 番 第 3 楽章 終結部」

このなまけもの→ヴィヴァルディ「四季より 冬」

魔女倒す→サン＝サーンス「死の舞踏」、サン＝サーンス「動物の謝肉祭より 大きな鳥かご」、リムスキー＝コルサコフ「熊蜂の飛行」、ウォルトン「ヨハネスブルグ祝祭序曲 中間部」

森の中を逃げる→サン＝サーンス「死の舞踏」

大団円→ベートーヴェン「ピアノソナタ第 14 番」、ベートーヴェン「交響曲第 5 番 第 4 楽章」、シューベルト「野ばら」

恐らく翻訳が古いからだと予想するが、森の中の魔女絡みの選曲が多くなかったことが意外。フンパーディンクに同名のオペラがあり、そちらからの連想もあった可能性を感じる(ベートーヴェンの月光など)。日本人の生活体験からは遠い物語だと認識していたため、グリム童話に票が集まることは予想していなかった。近年の絵本などでは子供を捨てる親の立ち位置が微妙にアレンジされているが、今回の課題は民間伝承の色が強いため若干忌避感があるのではと考えたが、そのあたりを選曲に反映させた回答であると解釈出来るものは、敢えて言うならラフマニノフ「ヴォカリーズ」くらいであった。

#### H 走れメロス

のそのそ王城へ（冒頭）→ビゼー「ファランドール」

ああ王は→ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番 冒頭」

メロスは激怒した→ベートーヴェン「交響曲第3番 第1楽章 第2主題への経過部」、  
ヴァーグナー「ワルキューレの騎行」、グレゴリオ聖歌「怒りの日」、  
プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第3番 第1楽章 冒頭」、モーツァ  
ルト「ドン・ジョヴァンニ序曲」

城に乗り込む→ドヴォルジャーク「交響曲第9番 第4楽章」

この短刀でなにを→リスト「ピアノソナタロ短調 冒頭」

命乞いなど決して→シベリウス「フィンランディア 冒頭」

メロス走り出す→ホルスト「惑星より 火星」、スメタナ「ブルタヴァ」

初夏、満天の星→ドビュッシー「月の光」

結婚式→ホルスト「惑星より 木星」

山賊奇襲→ドヴォルジャーク「交響曲第9番 第4楽章 冒頭」、プロコフィエフ「ピ  
アノソナタ第1番 冒頭」

死んだように深く眠った→ドビュッシー「夢」、ストラヴィンスキー「エディプス王冒頭」、  
ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番 第2楽章 冒頭」、シ  
ベリウス「フィンランディア 冒頭」

矢の如く走り出した→グリーク「山の魔王の宮殿にて」、ロッシーニ「ウィリアムテル  
序曲より スイス軍の行進」

ついてこいフィロストラトス→マーラー「交響曲第8番 終楽章」、ブラームス「悲劇  
的序曲 冒頭」

夕日に向かって走る→オッフェンバック「天国と地獄序曲」

登楼は夕日を受けて→リスト「ピアノソナタロ短調 冒頭」

私だ、形吏→チャイコフスキー「弦楽セレナーデ 冒頭」

ありがとう友よ→ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番 第3楽章 終結部」、シベリウ  
ス「フィンランディア 終結部」

万歳王様漫才→ラフマニノフ「交響曲第2番 第4楽章 終結部」

勇者は酷く赤面した→シベリウス「交響曲第2番 第4楽章 終結部」、スーザ「星条  
旗よ永遠なれ 終結部」、ブラームス「ハンガリー舞曲第5番  
終結部」

最も多くの回答者が選択したが、予想通りであった。ドラマとして有名であり、感動を  
持って幕を下ろす物語であるが故に「感動をもたらす楽曲」を選択しやすいと見込んでリ  
ストに入れたことが数字で裏付けられたと言える。

ただし、選曲範囲は非常に多岐にわたるであろう、との予想は的を射ず、ほぼ長大な楽曲の部分が選曲されていたことが特徴として上げられる。小品が選ばれたのはドビュッシー「夢」くらいであり、それも「深い眠り」という文字情報からの想起と思われる。逆に言えばその他は、文字にあらわれる情報ではなく、文字を読んで得られる内的な感情にマッチする曲を選んでいる、と評価する。

#### I 蜜柑 J「旅上」

各一名の回答しかなかったがこれは単独で取り上げる。まず旅上であるが、散文の候補三つの中では短歌である乱れ髪を除くと全部で九行と非常に短く、三つのシーンを切り出すのが大変に難しいテキストだった。旅上自体は有名な詩ではあるが、これに三つの楽曲を付す回答者がいるとは全く予想していなかった。

ふらんすはあまりに遠し→ラヴェル「クーブランの墓より プレリユード」

うれしきことをおもはむ→ラヴェル「クーブランの墓より リゴドン」

もえいづる心まかせに→ラヴェル「クーブランの墓より メヌエット」

今回の課題を集計して最も驚きを覚えた回答の一つ。同一曲からの配当ではあるが、組曲全六曲のなかから三曲を選出しており、その曲の持つ味わいと、詩の持つ味わいとを十分にリンクさせた回答であると評価した。何より、詩の末尾を楽曲の第二曲で結んでいるところはベストセレクトと賞賛したい。

次に蜜柑であるが、これは候補のテキスト軍の中では群を抜いて文学性が高い。しかしドラマ性は殆どなく、あるのは「豊かな色彩」と「空気感」で、これを楽曲でサポートするのは「旅上」とは違う意味で至難であると考えた。故にこれも回答者がいたことは意外であった。

私は横須賀発→ショパン「ノクターン第20番 20-47小節」

小娘の開けようとした→滝廉太郎「憾」

暮色を帯びた街はづれの→ベルリオーズ「幻想交響曲 第3楽章」

この課題に於いては選曲された楽曲よりも、テキストのどの部分に音楽を感じたかの方に感嘆した。決して長大ではないが、平易ではない文章から音楽の兆しを読み取ることは容易ではないと評価する。

### 3. 考察と結論

本研究は、音楽を専門に学ぶ大学生たる「音大生」が最低備えておくべき楽曲に関する

知識を『楽曲リスト』として提供することを目指して始められた。予備研究に於いて100曲リストを暫定的に定め、それを元に三年間、こういう曲を知らないのは流石に恥ずかしいぞ、という授業を行ってきて新たにたどり着いたのが、「曲を知っている、と言うことは果たして音楽の知識と言えるのか」、という問いである。知識を know that と know how に分類して考えるまでもなく、外界にある「何か」を記憶として蓄積することそれ自体を知識と呼ぶならば、記憶することが知識への正規のルートと言うことになる。ただし、音楽を記憶することとは、音楽と言う時間経過を内的に圧縮し、それを自由に解答して取り出せることである、という考え方が特に演奏専門の領域では支配的である。だからこそ、手の中に入った楽曲は暗譜しているものであり、それを取り出すために「演奏力」が必要になる。音大生は、こうした音楽知識を疑うことなく受け容れた上で、学生生活を過ごすことになる。

この“音楽科の常識”に則れば、音楽を知るにはまず演奏し、次に接し、触れ、聴く（聞く）必要がある。音楽を聴くことは別に専門に学んでいないものであっても理解できるだろう。ただし、音楽に接すること、触れることとは一体何か。演奏を生業としていれば、「聴くのではなく」同じ音空間を共有すること、音楽時間を共に過ごすことであることに共感できると期待する。そう、音楽家としての自分が確立すれば、音楽を自分の内側にインプットするためには本当に多くの方法があり、目的に向かって一直線のショートカットなど存在しないことが理解できると信じる。

ただし、まだ半人前でしかない音楽大学学部学生にこれを期待していいだろうか。私はここに「水先案内人」が必要であると信じ、自分がその責を果たすために出来ることは何か、真摯に考えて行き着いたものが「100曲リスト」だった。しかし、これを聞かせ、解説し、楽譜に照らし合わせ、周辺知識と関連付ける…このやり方では時間と労力をかけて与えたはずの「知識」は、何かを為すための役に立たないのではないか。今年度の「シーンに合致する楽曲を選ぶ」、という課題は、“100曲リストだけでは音楽的情報を得ただけであり、音楽そのものの知識に至っていない”ことを確認する意味で企図している。

生活の中で音楽が必要になる局面がどこか、と考えても、結局「音楽を提供する力」がなければ役には立たない。いや、役に立たなかった。今日、音楽は演奏者を必ずしも必要としないのだ。音源と言うものがあり、音楽再生機というものがあり、双方とも持ち運ぶことが出来る。人類の歴史始まって以来、ここまで音楽を手軽にアウトプット出来る時代はなかった。しかし、音楽を教える側はこの恵まれた…恵まれすぎてしまった…環境に適応した教授方法に対する理念をまだ確立できていないと考える。

沢山の曲を知っている、と言っても、その全てを暗譜しているのは指揮者のような音楽総括的な立場にいない限り珍しいことである。演奏者として研鑽を積んでいる若者であっても、自分が演奏した経験のない曲を「全て理解している」ことは望むべきではなかろう。

しかしそれでは、音楽を専門に学ぶ人間として、社会に対する責務を果たすのに十分な技術や…そして「知識」を身につけていると言えるだろうか。

そもその 100 曲リストは、クイズのような意味で“覚える”ことを目途としていた。しかし、今回の調査を通じて「覚えているだけでは使えない」ことが明らかになったと考える。

100 曲リストの前に「プレリスト」があったように、実を言えば音大に進学してくるような若者にとって「聴いた」「接した」経験のある音楽は非常に多い。それを想起するための引き金（トリガー）がないだけの話なのだと考えている。100 曲リストに基づく“音楽の知識”構築に当たっては、引き出せるのみならず、素材として何らかの作業に役立てる《ちから》として使えるものを目指すべきだろう。

今回の調査に於いてそれが強く確信できたのは、例えば「汚れつちまつた悲しみに」への回答である。

汚れつちまつた悲しみに 今日も小雪の降りかかる  
 汚れつちまつた悲しみに 今日も風さへ吹きすぎる  
 プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第 3 番第 1 楽章冒頭」  
 ラフマニノフ「エレジー」  
 汚れつちまつた悲しみは たとへば狐の革裘  
 汚れつちまつた悲しみは 小雪のかかつてちぢこまる

汚れつちまつた悲しみは なにのぞむなくねがふなく  
 汚れつちまつた悲しみは 倦怠のうちに死を夢む  
 プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第 3 番第 2 楽章主題」  
 リスト「超絶技巧練習曲第 12 番」  
 汚れつちまつた悲しみに いたいたしくも怖気づき  
 汚れつちまつた悲しみに なすところもなく日は暮れる風さえ吹きすぎる→  
 プロコフィエフ「ピアノ協奏曲第 3 番第 3 楽章冒頭」  
 モーツァルト「ピアノソナタ第 2 番第 2 楽章」

詩を朗読しているバックにこの曲が流れると考えれば音楽の時間が非常に長い。即ち、詩の中に流れる時間を音楽の中に内化する「イメージ」があってこそ出来る選曲であると評価した。非常に繊細且つ美しい。

文学作品に BGM をつける、という一種のゲームはそれなりに有名だが、一つのテキストに一つの曲、というのが定番だ。今回の課題は敢えて三つの曲を求めたところに狙いがある。要は「形式・構成」を音楽からきちんと学んでいれば、朗読も時間経過の中で成立する表現である以上、フレーズや、アクセントや、アゴーギグなどの濃淡は形式や構成と

して感知できる…はずだ。音楽を学ぶと言うことは、何かを知るだけではなく、何かを使える力を手に入れることである、と力説したくなるのは、今回このようなアウトプットを得られたところに大きく後押しされている。

#### 4. おわりに

最近の若者は本を読まない、と言われたのはもう 10 ～ 15 年くらい前の話だろうか。昨今の若者は、大人世代が思うほど本を読んでいないわけではない。しかし、書籍より更に興味を引くコンテンツが数多くあり、多くは無料で手に入る。結果的に読書習慣が堅牢な若者の如く築き上がる者の数は多くならない。そして、息をするように本を読む者に訊ねると、「面白い本がこんなにたくさんあるのだから」「いくら読んでも時間は足りない」と言う。これは古今東西を問わず共通である。

では、音楽はどうだろうか。最近の若者は音楽を聴かない？ そんなことはない。ただし…長い楽曲を聴くことはない。なぜなら、長い曲を聴くと曲の数を聞けなくなるから。2 倍速や、3 倍速で音楽を聴くものまでいるという。そんな「音楽聴取の習慣」を是正、矯正しなくていいのだろうか。

そこで考えるのが「面白い曲がこんなにあるんだから」というモチベーションだ。これをなるべく初学者の頃から定着させるために何をすべきだろう。

読書をしないのは、読みたい本がないから。読みたい本がないのは、本の面白さを知らないから。本の面白さを知らないのは、読書をしないから…としてしまうと最初に戻ってしまう。私は、本の面白さを教えてくれる大人に子供の頃にであっているかどうかが大きいのだと結論する。恐らく、音楽も、同じはずだ。

音楽大学で学んだのであれば、子供達に音楽の面白さをたっぷり教えてあげられる大人になってほしい。そんな学生の助けになれるべく、「音楽の知識」…使える力…を与えられるように力を尽くしたい。

